

Column

「東文研の歴史—所屋の新営と独立行政法人化」 引っ越しと現代美術資料の整理作業、そして黒田記念館改修

The History of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo—The Opening of the New Building, and the Transformation to Independent Administrative Institution (IAI) Status

Moving into the New Building, Collation of Modern Art Related Materials, and Renovation of the Kuroda Memorial Hall

東京文化財研究所の現在の建物は、平成 12（2000）年 1 月に竣工した。それまで、黒田記念館（本館）には、美術部、情報資料部があり、東京国立博物館の敷地内に別館があり、芸能部、保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが業務していた。それが、ひとつの施設内にあつまることができた。同年 5 月 11 日には、新館開所記念式典が地下のセミナー室でとりおこなわれた。

また、施設の新営とともに大きな変化としては、平成 13（2001）年 4 月 1 日に、当研究所が奈良国立文化財研究所と統合し、独立行政法人文化財研究所となったことである。

新営への移転、そして独法化、これが一気にやってきたというのが偽らざる感想である。

わたしは、その当時、美術部第二研究室長（独法化後は、黒田記念近代現代研究室長）であったので、美術部の研究員としての思い出を書きたいとおもう。

1 引っ越し

わたしは、平成 6（1994）年 11 月に東京国立近代美術館から、当研究所美術部に異動した。当時の黒田記念館にあった美術部第二研究室は、1 階の南側にあり、昭和 5（1930）年の美術研究所開所以来の資料で埋め尽くされていた。日本近代美術の研究者であれば、その資料の山が、どれも貴重なものであることを知らないものはいないであろう。ただ、このような資料群が全体でどのくらいの量になるのか、そこまではだれも考えてはいなかったのではないだろうか。引っ越しというのも、戦中期の疎開をのぞけば、この研究室は体験していないのだから。

第二研究室自体が、日本の近代美術のアーカイブになっていたのだが、その全体がどれくらいの量なのか、概算で決められた新営 2 階のスペースに納まりきれぬものだろうか、それが心配だったことを覚えている。その資料とは、展覧会カタログ、それから目録、ポストカード、チラシ等の今日というエフェメラ類、手稿、写真、写真カード等々、様々な形態である。そこで、この引っ越しを機会に、第二研究室が管理していた図書、並びに約一万冊の展覧会カタログは、情報資料部が管理する古美術関係の本、雑誌類と統合することになり、資料閲覧室の書庫に収め、一括して管理され公開されることになったのは幸いであった。

当時の記録では、1 月に新営竣工、順次各部署の引っ越しがはじまり、3 月には全部署の引っ越しが完了している。何とか収まったときは、安心したが、それもつかの間つぎの仕事がまっていた。

2 現代美術資料の整理作業

引っ越しと新営での業務のための作業に加えて、平成 12 年 6 月からは寄贈資料の受け入れと整理作業がつづいた。その資料とは、都内在住の笹木繁男さんという方が、1960 年代から収集されてきた現代美術の資料をもとに、ご自宅を「現代美術資料センター」として、これまで研究者にむけて公開されてきた、その膨大な資料群のことである。第二研究室が保管する資料群を補完する点からも、是非寄贈していただきたいと願った結果である。この当時、わたし自身が、この資料整理の最中に書いた記事があるので、その一節をつぎに紹介したい。

「膨大であるがゆえに、これまで 97 年、98 年の 2 回にわけて搬送した。最後にあたる今年（注：2000 年）は、これから残りを搬送しなければならない。今わたしたちは、これまでに運び込んだダンボール箱約 300 箱と格闘中である。ガランとしたかつての本館資料室に 300 箱を積み上げて、ならべてみると壮観である。そして、よくぞここまで集められ、それが笹木さんのご自宅に納まっていたものだな、とあらためて驚いたり、感心したりしていた。しかし、これからはたいへんである。資料の内容は、書籍、画集、雑誌、美術館、画廊等での展覧会カタログにはじまり、笹木さんが作成した作家、画廊、美術団体、美

術運動別のファイル、チラシ、DMにいたるまで、多種多様であり、もう数をカウントすることはできず、それぞれが量として圧倒的なのである。いま、それらを仕分け、すでに研究所が所蔵している資料と重複をさけるために、照合作業にかかっている。この作業が、いったい何時おわるのか先がみえず、とはいえ寄贈してくださった笹木さんの志を生かすためにも、公開にむけて急がねばならず、アルバイトさんたちを動員して、いっしょに汗をながしている。」(『近代美術アーカイブとダンボール箱』、『現代の眼』523号、2000年8月)

この整理作業は、情報調整室・資料閲覧室(平成13(2001)年4月、独法化にともない、情報資料部は、協力調整官一情報調整室に改められた。)の同僚たちの協力とアルバイトさんたちの力で、その後もつづけられ、平成14(2002)年3月に寄贈目録(CD-ROM版)刊行までたどりつけることができた。

3 黒田記念館改修

さて、美術部第二研究室は、独法化の折に黒田記念近代現代美術研究室に改称された。「黒田記念」と冠されたとおり、黒田記念館の公開業務も同室の担当であった。その黒田記念館では、平成13(2001)年1月より2階部分の改修工事がはじまった。目的は、それまで研究業務を行うための施設として空調等の改修を重ねてきた同記念館2階を創建当初(1928年竣工)のかたちに戻し、黒田清輝の作品とともに公開することであった。しかも従来の黒田記念室に加え、会議等に使用していた2階陳列室も展示室に改修してギャラリーとし、黒田清輝作品を約50点展示することができるようになった。改修にあたっては、2階の記念室、陳列室が、創建当初、天井から外光を入れていたことから光天井風にし、また空調も作品に影響を与えず、同時に当初の壁面を保つために、部屋の中央に空調の吹き出し口を設けるなどの工夫がこらされた。また旧美術研究所所長室も、公開スペースにして、美術研究所時代の写真や資料を展示し、パソコンを設置して当研究所のホームページを来館者に見ていただくようにした。工事完了後の同年9月からの公開にあたっては、それまで毎週木曜日の午後に加えて、土曜日の午後、さらに秋には「特別公開」として一週間公開することになった。

これらに加えて、独法化という大きな波によって、調査研究の業務においては、5年を区切りとする中期目標、中期計画に基づき、その成果の公開が一段と問われることになった。新営への移転とそうした独法化にともなう業務の変化に当初戸惑いながら、また緊張しながらも、研究所全体が、懸命に報告書の刊行等の成果の公開につとめていた。そうした流れは、今もつづいているのだが、わたしの所属していた美術部第二研究室にかぎれば、以上のようなことが思い出にのこっているし、振り返ればよくやったものだとおもっている。

(副所長・田中淳)

Digest

Construction of the building in which the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo is currently located was finished in January 2000. At that time, the Department of Fine Arts and Department of Archives were located within the Kuroda Memorial Hall (main building), while the Department of Performing Arts, Department of Conservation Science, Department of Restoration Techniques and Japan Center for International Cooperation in Conservation were located within an annex of the Tokyo National Museum (TNM). The construction of the new building made it possible for all of the Institute's constituent units to be located within the same premises. A ceremony to mark the opening of the new building was held on May 11, 2000 in the Seminar Room in the building's basement level.

Another significant change that took place at around the same time as the opening of the new building was the merger on April 1, 2001 of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo and the National Research Institute for Cultural Properties, Nara, to form the Independent Administrative Institution—National Research Institute for Cultural Properties.

The successful completion of the relocation into the new building and of the transformation to Independent Administrative Institution (IAI) status within such a short space of time was cause for a genuine sense of achievement on the part of all concerned.

I was inspired to note down this record of these events as, at the time, I was serving as head of the Modern/Contemporary Japanese Art Section (following the transformation to IAI status, this section was renamed the Modern/Contemporary Art Section), and also as a Researcher in the Department of Fine Arts.

(TANAKA Atsushi, Deputy Director General)